

「ジャーナリスト同盟」通信

ジャーナリスト同盟Web機関紙

2008年06月18日

本澤二郎の政治評論「村上誠一郎君を励ます会」: 本澤二郎

自民党きっての平和主義者の総理大臣で知られた三木武夫のもとで修行した村上誠一郎衆院議員の励ます会が昨夕(6月17日)、東京・芝の東京プリンスホテルで開かれた。毎年1回の集金パーティーなので、過去に何度も出向いている。

しかし、今回は様子が違う。壇上前面に当人の率直な政治・経済・マスコミ分析を掲示してある。内容は大半的を射ている。小泉改革さえもぼろくそに批判分析している。ことほどまとものだ。小泉内閣で入閣したというのに是は是、非は非が村上流である。さすがは三木の弟子である、と感服、傍らのヒグマ秘書に「これの資料はないか」と陳情してしまった。

現在、派閥の名称は高村派である。かつての三木派には井出一太郎、赤城宗徳それに一時期、平和・軍縮派の宇都宮徳馬らそうそうたる顔ぶれ、いずれも平和主義者が轡を並べていた。保守本流の宏池会同様に右翼・改憲派は皆無だった。その面影のなくなったのがなんとも寂しくも、わびしい思いで眺めていたのだが、村上はそうでもないらしい。一度、取材しようと考えて、帰り際に本人と秘書に伝言した。

会の発起人である高村外相は「一級の政策マン・仕事師。あと1年ぐらい解散はない」、大島国対委員長は「いよいよ本音の時代。正論のはける財務大臣になれる」、鴨下環境大臣は「我々の言えないことを発信する政治家」、最後に若林農水大臣がそれぞれ激励した。経済界からは麒麟・ホールディングの佐藤、川崎汽船の前川という御仁があいさつした。

閑取でも通用するような巨漢の持ち主の村上は、マイクを握ると冒頭、舌鋒鋭く小選挙区制と郵政改革を批判した。「今の政治家は選挙とポストしか考えない」と筆者が日ごろ慨嘆している表現を用い、絶叫した。「問題の年金は誰一人掌握していない」「もはや経済成長はありえない。このままだと毎年60兆円の赤字が続く」「21世紀は水と食料の争奪戦の世紀になる。米国サンフランシスコに水はない、800キロ先のロッキー山脈から持ってきている。莫大な金をかけているのだ」「思考能力をつける教育が求められている。現在、マスコミはお笑い芸人50人に牛耳られて、インテリは正論を言えなくなっている」などなど。

彼は消費税アップに熱心のようなのだが、その前になすべきことは政治家を含めた公務員の数と賃金の半減であるが、どうなのか。

余談だが、高知県という吉田茂のふるさとであるが、南国市千屋崎病院の高橋正六院長が何度か高知に呼んでくれた。彼の宴席に若い代議士がいた。それが村上だった。高橋の縁で公正取引委員会の字引といわれる後藤英輔元事務局長と知り合ったが、彼も村上励ます会に参加していた。あいにく声をかける機会がなかった。その分、料理を平らげて「食べすぎ」を心配して帰宅した。